

イギリス文学評論

II

Critical Studies
in
English Literature

内多 毅 監修

杉本龍太郎 編

内田能嗣

イギリス文学評論

II

Critical Studies
in
English Literature

内多 毅 監修

杉本龍太郎 編
内田能嗣



創元社

〔執筆者紹介〕

内 多 毅	東海大学名誉教授，文学博士
石 田 久	大阪大学教授
杉本龍太郎	大阪女子大学教授
岸 本 吉 孝	梅花女子大学教授
山 田 豊	龍谷大学教授
佐 藤 芳 子	羽衣学園短期大学教授
上 村 盛 人	奈良教育大学助教授
池 田 栄 一	東京学芸大学助教授
仙 葉 豊	大阪大学助教授
坂 本 武	関西大学教授
三ッ星堅三	松蔭女子学院大学教授
瀧 勝 也	大阪成蹊女子短期大学教授
内 田 能 嗣	帝塚山学院大学教授
津 田 聖 子	帝塚山短期大学教授
山 本 優 子	日本女子大学助手
笹 江 修	神戸大学助教授

イギリス文学評論Ⅱ

昭和62年4月20日 第1版第1刷発行

検 印
省 略

監修者	内 多 毅	杉 本 龍 太郎
編 者	杉 本 龍 太郎	内 田 能 嗣
発行者	矢 部 文 治	
印刷所	岩 岡 印 刷 株 式 会 社	

発 行 所

株式 創 元 社
会 社

大阪市北区西天満1丁目4-2 郵便番号[530]
電 話 (06) (363) 2531(代) 振替大阪57099
東京支店 東京都新宿区山吹町77 郵便番号[162]
電 話 東 京 (03) (269) 1051

© 1987 ISBN4-422-81032-4 Printed in Japan

目 次

序 論——内多 毅	3
詩の部	
第1章——石田 久 『ハムレット』と時間の潮行	17
第2章——杉本龍太郎 『うたと小曲』の創作と伝達と受容	30
第3章——岸本 吉孝 「はにかむ恋人に」——その形而上詩的特質について——	45
第4章——山田 豊 「老水夫行」における倫理的主題	58
第5章——佐藤 芳子 「秋に寄せるオード」——解釈と評価——	72
第6章——上村 盛人 ナイティンゲールに囲まれたスウィンバーン ——「イティルス」をめぐる——	87
第7章——池田 栄一 「ブルーフロック」の図像学的解釈 ——ピエロの恋唄——	99

小説の部

第1章——仙葉 豊	
スウィフトの暗い低音部 ——『控えめな提案』を中心に——	115
第2章——坂本 武	
寓意としての感情教育 ——ヘンリー・マッケンジー『感情の人』の主題と構造——	128
第3章——三ツ星堅三	
『骨董屋』の魅力	143
第4章——瀧 勝也	
『嵐が丘』——「語り」と愛の底流——	161
第5章——内田 能嗣	
「ギルフィル氏の恋物語」——カテリーナの恋——	175
第6章——津田 聖子	
『ダーバヴィル家のテス』——ベイススの勝利——	189
第7章——山本 優子	
「私」から「私たち」へ ——『歳月』試論——	205
第8章——笹江 修	
「チャタレイ夫人の恋人」——「ジョン・トマス」と「レイディー・ジェイン」の結婚——	220
あとがき——内田 能嗣	235

イギリス文学評論II

序 論

1 危機と批評

「批評」(‘criticism’)はギリシア語の *kritos* (審判) から由来する。文学についての判定を下すということになる。この類語としての ‘critical’ という言葉は、医学的用語として、病気が危険な状態、「危篤」ということを意味する。また ‘crisis’ (「危機」)⁽¹⁾とも関係する。

このように見てくると、人々の生活や、社会の構造、文化の価値観などが、大きく転換するとき、人々は危機の意識をもち、そこから批評を生み出してくるのであろう。ここでは、20世紀における「知の危機」、17世紀の「死の危機」、紀元前5世紀の「生の危機」について考えてみたい。

2 知の危機

人間は、ホモ・サピエンス (*homo sapiens*) とかホモ・ファベル (*homo faber*) とか呼ばれて、肯定的な評価を与えられてきたが、今日では、ホモ・パティエンス (*homo patiens*) ——病める動物＝人間—— と呼ばれることになってしまっている。このように人間に負の呼び名がつけられるということは、これまで大切に受けつがれてきた文化とか、文明とかが、もはや正の符号を与えることができなくなってきたということなのであろう。大切に家宝として受けついできたダイヤモンドの指輪が、鑑定をしてもらったら、偽物とわかった時のようなショックを、今、人類は受けている。実は、本物とか偽物とか、二元論的にとらえる認識のしかたが、本物かどうかが問われるようになってきたのである。ギリシアのプラトーン (*Platōn*) 以来のヨーロッパの知の形而上学が、ここに来て、大きく揺らぎ出したということになるのであろう。20世紀の人々が経験してきた知の危機はどのようにして、われわれの意識にのぼるようになってきたのであったか。

ロシアの画家カンディンスキー (*Vasilii Kandinskii*) は1913年に『回想』をベ

ルリンで公にした。このなかで、彼の心底を揺さぶった生涯の思い出として、次の3つのことをあげている。①モスクワで開催されたフランス印象画展で、モネ (Claude Monet) の『積みわら』を見たこと。②ボリショイ劇団におけるヴァーグナー (Wilhelm Richard Wagner) の『ローエングリン』⁽³⁾の上演を見たこと。③「原子の崩壊」という物理学上の発明に遭遇したこと。

この原子の崩壊というのは、イギリスの実験物理学者ラザフォード (Ernest Rutherford) が、原子崩壊の法則を1903年に打ち出し、さらに粒子衝撃により、初めて原子を人工的に破壊するにいたったことをさしている。これまでは分割することができないから「原子」 ('atom') と呼ばれてきたものが、分割可能になったことの衝撃の大きさは測り知れないものがあつた。

やがて1927年、ドイツの理論物理学者ハイゼンベルグ (Werner Karl Heisenberg) が、「不確定性原理」を発表し、1955年には『物理学者の自然についての着想』を公にした。「原子核などの素粒子を、客観的に観察することは不可能なことだ。というのも、観察するという行為には光を必要とし、こういったミクロの世界では、そのエネルギーが観察すべき素粒子を跳ね飛ばすような妨害を行なうからである。だから、われわれ人間には、素粒子そのものの運動は永久にわからない。」⁽⁴⁾ 光の導入によって、観測の対象が変化を受けるとなると、「方法」 ('method') と「対象」 ('object') とは、もはや二元論的な関係ではなくなつた。

物理学におけるこういうことに平行的なことが、哲学の世界でも進行した。フッサール (Edmund Husserl) の現象学がそれであつた。彼は『純粹現象学および現象学的哲学考察』を1913年に出した。この年は、偶然にも、ラザフォードが原子模型を提示した年であり、カンディンスキーが『回想』を公にした年であつた。

17世紀のデカルト (René Descartes) は、外界世界に存在する対象 (object) は客観的存在として、われわれはそれについての信頼するに足る情報を得ることができるとした。これに対して、20世紀のフッサールは、対象は独立して客観的に存在するものではないと主張する。われわれは対象を受動的に受けとるのではなくて、積極的に対象を構築していくのだとする。「現実」といわれるものはないのであって、あるのは、人間の意識のなかに浮上する「現象」のみだとするのである。

こうした物理学や哲学の世界で起きたことと平行的なことが、言語学で起こり、このことが、やがて、文学批評、文学理論に大きな影響を及ぼすことにな

った。スイスの言語学者ソシュール (Ferdinand de Saussure) の『一般言語学講義』 (*Cours de linguistique générale*, 1916) がそれである。「彼は、世界に対するわれわれの知識は、その表象に奉仕する言語のために、手のつけられないほどこみ入ったかたちで形成され条件づけられているのだと主張した。記号の「恣意」性の主張をしたソシュールは、常識が語とモノとの間に想定する自然的な結びつきを断ってしまうことになった。・・・言語は現実に関われた「窓」を、・・・現実を忠実に映す鏡を提供するどころか、確立した意味作用からなる錯綜したネットワーク全体をもたらし(5)ものである。」

ソシュールの構造主義的理論をさらに発展させたディコンストラクションは、どういうことを主張するのであろうか。T. イーグルトン (Terry Eagleton) に聞いてみたい。

いわゆる、イェール・ディコンストラクション学派と呼ばれる人たち・・・のなかで、とりわけド・マンの批評は、文学言語がたえまなくその意味を自己解体している点を立証することにもつばらさきげられてきた。事実、ド・マンは、ディコンストラクション操作のなかで、ほかならぬ文学の「本質」を定義する新しい方法を発見したと言ってよい。あらゆる語は、ド・マンが正しく見抜いているように、どこまでも隠喩的であり、喩や文彩なくしては仕事はできない。したがって、言語が字義通りに字義通りだと信ずるのは誤りである。哲学や法律や政治理論は、詩とまったく同じように、メタファに(6)たよる。それゆえにみな等しく虚構である。」

今日、われわれは文学理論においては、余りにも難解な言語理論について多くのことを聞かされる。文学についての理論が、なぜこれほどまでに、言語にこだわらなくてはならないのであろうか。このことについて、丸山圭三郎に聞いてみたい。

つい最近までは、多くの文化人類学者が、人間を *homo faber* (道具を作るヒト) として定義し、文化を示すぎりぎりのメルクマールは人工の物の存在だと考えていたが、ヤーコブソン R. Jakobson を介してソシュールを知ったレヴィ=ストロース C. Lévi-Strauss によってこれまでの通念が大きく修正されることになった。つまり文化と自然の境界線は道具の存在ではなく〈分節言語 *langage articulé*〉の所有によって引かれ、まことに、ここにおいてこ

そ其の飛躍が見られるというのである。人間が homo faber であり, homo sapiens (知恵のヒト) であるためには, まず homo loquens (言葉をもつヒト) である必要があった。つまり, 道具一般の製作は「一定の効用を考える」思考を可能にした言葉の存在が前提となる。言葉はその意味でも, より始源的な〈道具〉⁽⁷⁾にはかならない。

それならば, ディコンストラクション批評は, 具体的にどういうものなのであろうか。日本英文学会第58回全国大会(関西学院大学)では, ヒリス・ミラー(J. Hillis Miller) イェール大学教授を招いて, 特別講演“Is There an Ethics of Reading? Henry James' *What Maisie Knew* as Example”が行なわれた。ヒリス・ミラーはイェール学派に属している。彼はその経歴においては, まず Harvard において‘the New Critical dissertation’を試み, やがて1953年から1972年までの間, Johns Hopkins でフッサールがはじめた現象学にもとづいて, ‘phenomenological criticism’を展開した。彼は三転して Yale に移り, ‘deconstruction’批評の有力メンバーとなって今日に及んでいる。

彼にはトマス・ハーディ(Thomas Hardy)の作品についての批評の書物が数冊⁽⁸⁾ある。そのなかの一冊に *Fiction and Reception: Seven English Novels* があり, 七つのイギリス小説の1冊として, トマス・ハーディを取りあげている。この書物の影響下において, ブリン(J. B. Bullen)は *The Expressive Eye: Fiction and Perception in the Work of Thomas Hardy* (Oxford Univ. Press, 1986) を刊行した。ブリンはこの書物で, ‘conscious Hardy’とともに‘unconscious Hardy’を浮かびあがらせようとするのである。具体的には小説にあらわれる‘symbols’によって, その目的を果たそうとするのである。第8章で『テス』(*Tess of the d'Urbervilles*) をとりあげる。そのなかに‘Solar myth and Tess of the d'Urbervilles’というところがある。ここではヒリス・ミラーが *Fiction and Repetition* のなかで, 太陽は伝統的には豊饒の源とされているが, それと同時に, 破壊的なエネルギーでもあると指摘するところを援用して, 論を進めている。ブリンは『テス』における太陽のシンボルがどのように働いているかを分析していくのである。主人公のテスが Talbothays の酪農場で働くときに, テスに働きかける太陽と, この小説の最後で, テスが Stonehenge で出会う太陽とは如何に異なる太陽であるか。一方は彼女に恋を与え, 他方では死を与える。ブリンの『テス』論は, 太陽というシンボルの分析なのである。

さきに触れたソシュールの言語についての考えでは, 言語は, 整然としたも

のではなく、錯綜したネットワークであるとするならば、E.M.フォースターの『小説の諸相』においてとりあげた‘plot’とか‘character’とかでは、その意味はすくいあげることはできなくて、所詮、シンボルを手がかりにたよるほかないということなのであろうか。しかし、こうした小説理解の技法は、伝統的な小説批評になれたものにとっては、知の戯れではないのかという疑問と不安におそわれることであろう。しかし、さらに考えてみると、すでに述べてきたように、脱構築は、現代文明が人類にとって破壊的な文明の線上を走ることになった根源には、一見確かにみえて実は不確かな言語が存在し、言語はその不確かな側面が見のがされて、一つの「物神」(フェティッシュ)として存在してきたことを指摘し、言語と、言語がつくり出す概念、そして文化と文明を解体することの意味を明らかにしようとしているものである以上、脱構築は、一見知の戯れのように見えても、今日の人類文明の危機を打開することに役立ってくれるものであることを信じて、脱構築の将来に期待したいと思うものである。

3 死の危機

人間は早くから死について考えた。メソポタミアの『ギルガメシュの叙事詩』にこのことをうかがうことができる。ギルガメシュは、友人エンキドゥの死に遭遇した。ギルガメシュは死にたくないと思った。彼はそこで、永遠の生命をもった唯一の人間ウトナビシュティムに会うために苦難の旅をつづけた。ウトナビシュティムは、永遠に生きるためには、海の底からトゲのある香ばしい、若がえりの草を取ってこなければならぬと教えてくれた。ギルガメシュは教えられたとおりにしたが、帰途、一瞬の油断から大事な草を蛇に吞まれてしまった。これで彼の不死の望みは断たれることになった。⁽⁹⁾

『ギルガメシュの叙事詩』は紀元前2300年頃のものといわれる。ホメーロスの叙事詩に先だつこと約1500年である。⁽¹⁰⁾ギリシアのソークラテース(Sōkratēs, 前469—前399)は死刑を宣告されて毒杯を仰いで死んでいった。死を直前にして友人たちと生と死について語りあった。その言葉はプラトーンによって『パイドーン』としてわれわれに残されている。ソークラテースは、人間は肉体と魂とからできているが、死によって肉体は滅びるが、魂は死ぬことはない。肉体には悪が宿り、善である魂を悩ます。死によって、魂は肉体と分離して悪に悩まされることがないから、死は願わしいことだという趣旨のことが述べられている。ローマのセネカ(Seneca, 前5(4)—後65)は、皇帝ネロの家庭教師として

有名であるが、ギリシアのストア哲学とエピクロス主義の思想とを取り入れながら処世術を展開した。『ルキリウス書簡』のなかで、死について述べている。人間は何でもないことを怖れる幼児性を早く克服すれば、死の恐怖を克服できるとしている。

中世ヨーロッパは、キリスト教が精神界を支配した世界であった。ダンテ(Dante,1265—1321)の『神曲』にもあらわれているように、地獄、煉獄、天国が調和を保って存在している。現世と来世とが矛盾なく連続していた。

こうした安定した精神秩序が生み出されたのは、単に教会の力だけではなく、中世ヨーロッパがそのなかに生活していた社会は、農業共同体の社会であった。人々は畑の作物が春、芽を出し、秋、実を結び、やがて春には再び芽を出す、いわば生→死→再生の循環を目の前に見る生活を送った。人間もまた自分を、生と死の循環においてとらえた。

中世が次第に近代に向かって進むにつれて、社会構造に変化があらわれてきた。たとえば、フランスにおいては、12世紀の末から13世紀にかけて、農民とは異なる生活形態のなかに生きる商人が次第にその数を増加し、商人たちが街道を往来する姿が目立つようになってきた。ここで都会が次第に発達し、社会構造の都市化が進んでいった。その反面、農業共同体は力を失い、個人に分解していった。

共同体から個人への社会構造の、ゆっくりとした、しかし力強い変化の過程のなかで、ポーランドにコペルニクス(Nicolaus Copernicus,1473—1543)があらわれることになった。彼は死の直前の1543年に、ニュルンベルグで『天球の回転について』を刊行した。ギリシア以来中世に受けいれられてきたプトレマイオスの宇宙大系である天動説に反対して地動説を唱えた。これはキリスト教的世界観に大転換を迫るものであった。カトリック教会は勿論大反対である。1616年にはカトリック教会の禁書目録に加えられることになった。1822年に解除になるまで、実に206年の年月を必要とした。この約200年という、17世紀から19世紀までの間に、宗教的パラダイムが科学的パラダイムへと転換していった。1859年にダーウィン(Charles Robert Darwin,1809—82)の『種の起源』が刊行されたことも、この際思い出してみたい。

『天球の回転について』の1543年から『種の起源』の1859年までの間は、人間の精神史において大きな転換をもたらした時期であった。ギルガメシュ、ソークラテース、セネカ、キリスト教、ダンテにおいて、人間理解の中心におかれた死が、やがて死ぬという、死の死とも呼ばれるべき変化が、この期間に、

徐々に進行した。これはまさに、死の危機と呼ばれる事件であったのであろう。こういう危機に対する批評としてまずあらわれてきたのが、16世紀のモンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533—92) であった。彼はコペルニクスにおくれること60年に誕生した。彼の『随想録』(第1, 2巻1580, 第3巻1588)は、死についての多くの頁をさいてはいるが、死の危機における死を考えているので、やがてこのことは、死の死を導き出す契機を含んだものとなっている。モンテーニュに28年おくらせて誕生したフランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) の『随筆集』(1597)は、もっぱら現実の政治にかかわるものとなった。ラ・ロシュフコー (La Rochefoucauld, 1613—80) の『箴言と考察』(1665)は、死の死への吊いの書とも言えそうである。

プトレマイオスの宇宙大系は、自然界だけにとどまらず、その analogy が人間界にも影を投じた。プトレマイオスの天文学ではすべての天体は円軌道を描いて運行した。円構造が人間界にも及んだ。聖なる世界の円構造の中心には教皇が置かれた。俗なる世界の円構造の中心には皇帝が据えられた。こうした円構造は人々の心を強くとりえた。コペルニクスが地動説を唱えても、惑星の軌道は円軌道であった。円構造が打ち破られたのは、ケプラー (Johannes Kepler, 1571—1630) があらわれてからであった。

ルネサンスの芸術を説明するときに①ハイ・ルネサンス、②マニエリスム、③バロック、④ロココの様式を持ち出すことがある。この4つの図式は文学にも適用されることがある。シェークスピアの『ハムレット』(Hamlet, 1600—1601)では、先王ハムレットの不慮の死によって、デンマーク宮廷の円構造は崩れていく。クローディアスとハムレット皇子との2つの中心をもつ楕円構造となってくる。このことは②マニエリスムの図式の中に、『ハムレット』が入れられることになるのであろう。『マクベス』(Macbeth, 1605—6)のなかで、マクベスはダンカン王を殺害する直前において、もしこのことをやってしまえば現世でのことはすべて成就するのなら、来世のことは目をつぶるという趣旨の言葉を述べるところがある。この時点でマクベスの意識のなかには来世はない方がいいということがあるのであり、やがて存在しないということがだんだん自己催眠的に強くなって、ダンカン王を殺すのであろう。来世を切り捨てて、全エネルギーを現世という一点に注ぎこむとき、ほとぼしるようなエネルギーが出てくる。これがバロックの芸術であり文学であらう。『オセロ』(Othello, 1604—05)はそういう悲劇として考えられるのではないか。ハムレットは、そこからは何人も帰って来た人がいない来世について心をわずらわす。マクベスは、来世に

は目をつぶろうとする。オセロの情熱は来世の踏み込む余地を残さなかった。

このようにして16—17世紀の間に、人々は、死に別れを告げようとしたのではなかったか。18世紀にはいと、生のみやさやかな安らぎのなかに身を置こうとする願望が次第に高まってくるところに、ロココの芸術や文学が生まれたのであろうか。アレグザンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の『髪
の毛盗み』 (*Rape of the Lock*, 1712) や『人間論』 (*An Essay on Man*, 1733-34) は、ともに、ロココの様式において理解することができよう。ポープの『人間論』は、来世を捨象した現世の人間論である。こうした18世紀の世界像の土壌が19世紀へと受けつがれていくと、そこにコント (Auguste Comte, 1798-1857) の実証主義の社会学が樹立されることになるのであろう。イギリスでも19世紀には宗教よりか経済学が人々の心をとらえた。カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) は経済学を 'dismal science' ときめつけた。アーノルド (Matthew Arnold, 1822-83) は、ヘブライズムの生産主義を抑制するために、ヘレニズムの教養をあわせ身につけるべきことを説いた。ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) は物質主義に対して、美の意識を主張しようとした。

以上述べてきたように、近代において死は次第に危機をむかえた。今日では死についての意識は極めて稀薄になってきている。人間が死を死なせることは、やがて生を死なせることに気づいていないようである。

4 生の危機

人類が人類革命において、森のなかの樹上の生活から地上に降りて、後肢二本で直立するようになり、生命保持のために狩猟採取の生活にはいった。農業革命によって、穀物を収穫することになり、少なくとも一年間生活のための物資を備蓄することが可能になった。生活も安定した。それなのに一方においては近隣が相互に戦うようになった。中国では黄河の流域において、春秋から戦国にかけて、戦^{いくさ}がつづいた。黄河の氾濫によってつくられた大平原に殷の国が生まれたが、やがて西からやってきた周にとってかわられた。周は広大な土地を王家の子弟に与えた。ここに都市国家が生まれ、群雄割拠の時代を生み出していった。戦争にかり出される一般大衆の生活と生命は犠牲にされていった。こういう世界は悪い世界である。しかしいくら悪い世界だといっても生きていかななくてはならない。どう生きるのか。二つの生き方があった。「一つはこの世界に生きることであり、もう一つはこれから退くことであつた。」孔子や韓非子

は、現実の世界に立ち向かっていった。老子や莊子は、現実の世界から身をひいた。韓非子は社会の規範として法を重視した。彼は社会を支配する規準を示すとともに、また統御する術を諸侯に説いた。彼の説いた法と術とは、秦の始皇帝に採用されて、重用されそうになったが、李斯のねたみに会い毒殺されて生涯を閉じた。孔子は、韓非子の法に対して礼を唱えた。彼は韓非子のように毒殺にあうことはなかったが、なかなか苦勞の多い生涯であった。

孔子(前552—479)は、先にも触れたように、礼を掲げて政治コンサルタントとしてこの世に生きようとした。彼は老子や莊子のように、この世から逃れて身を隠して生きようとはしなかった。孔子は現実主義者であった。「未だ生を知らず、^{いずくんぞ}焉、死を知らん」と言い放った。

孔子は魯の国に生まれた。早く父を失い、また母をも失った。孤児としての苦勞をした。後年、孔子の知恵をたたえる人に対して、「吾^わ少^{せう}くして賤^{けん}しかりき。故に鄙^ひ事^じに多能^{たのう}なり」と答えている。孔子は一応貴族のはしくれである。卿^{けい}、大夫^{たいふ}、士^し、庶人^{しよじん}、の士である。

春秋から戦国にかけての時代は、下剋上の時代であった。有能な「士」は求められた。孔子はそれに応じようとした。彼は都市国家を否定して、王朝を説いた。このことは君主には受けいれられたが、その下の豪族に反対され、なかなか職にありつけなかった。孔子は諸国を転々とした。「五十にして天命を知る」という言葉が残っている。孔子はこの時魯の陽虎に協力して、ここで腰を落ちつけようとしたのであった。彼はここで大司寇^{だいしこう}(司法長官)になったが、やがてまた魯の国を去らなくてはならなくなった。孔子にしても誤算があった。彼は55歳にして魯の国を去った。それから14年国南の諸国をまた転々とした。69歳にして魯に呼びかえされて曲阜に学園を開いた。そこで約5年足らずして死去した。一応安定した生活ではあったが、この間に長子の孔鯉^{こうり}が死んだ。高弟の顔淵が若くして死に、愛弟子の子路が非業の死をとげた。孔子はどの人でも生きること全精力を傾けてやっとなんか生きのびた。孔子の時代から約2500年が経過して、文明が進んだ今日は、却って生きることが、はるかに困難の度を加えてきた。アフリカ大陸はその典型的な例であろう。ジンバブエのカトリックの宣教所で教師をしている渡辺真美は次のように両親に書き送ってきた。「相変わらず、たくさんのモザンビークの難民たちがいます。いろいろな悲しい話を耳にします。先日は母親が子どもを井戸へ突き落とし、殺してしまいました。」

世界の歴史で一番繁栄した19世紀のイギリスにおいても、労働者の生活は苦しかった。トマス・フッド(Thomas Hood, 1799—1845)に「シャツのうた」(Song

of the Shirt',1843) というのがある。ここでは女工が、「何も大したことを望むものではありません、せめて泣く時間だけがほしい」と訴えている。生の危機は、人類が農業革命を遂行して以来、産業革命、技術革命、情報革命と文明が進むにつれて、一回りずつ大きくなってきたようである。

5 批評の多様性

現在われわれは文明社会に生きていると思っている。これはフランシス・ベーコンが、「知は力なり」と誇らしげに、知の幕あきを宣言した、その流れを汲んでいるものである。しかし現代文明が危険一杯のものであることは、アメリカのスペース・シャトルが打上げ直後に爆発したり、ソ連の原子力発電所が事故を起こしたりすることによって、現代文明は、所詮、「バベルの塔」でしかないことになる可能性を含んでいることが明らかとなっている。先に述べたように、文化とか文明とかいうものは、極めて安定した価値あるもののよう一般には思われてきたが、ある段階までくると人間を管理し抑圧する破壊的なものであることが、日ましに明らかになりつつある。それは文化、文明の基礎をなしている言語が、一見厳密を極めたものであるようでありながら、実は不確かなものであることが、次第に明らかになってきた。言語のうえに概念が、そしてそのうえに文化や文明が打ちたてられている。これは、蛇のうえに亀が乗り、さらにそのうえに象が乗っているような不安定きわまりないものである。蛇がひとゆれすると、大きな象も、すってんころりと倒れる。バベルの塔の倒壊ということになる。批評はこういう大きな問題に直面している。何処からメスを入れるか。多くのメスの入れ方があることであろう。危機が多様である。メスの入れ方も多様である。批評もまた多様なものとなるであろう。しかし基本の問題は、危機の解明とそれに対する処方箋であることから目を逸らせてはなるまい。

注

- (1) レイモンド・ウィリアムズ、岡崎康一訳『キーワード辞典』（晶文社、1980）、p.102.
- (2) 丸山圭三郎『文化のフェティシズム』（勁草書房、1984）、p.64.
- (3) 土肥美夫『抽象絵画の誕生』（白水社、1984）、p.185.